

平成 28 年度 研究成果報告書

Research Achievement Report FY2016

講座名・職名 Course Title・Job Title	アジアⅡ講座・教授
氏名 Name	加藤昌彦
専門分野 Academic Field	言語学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	ポー・カレン語及びビルマ語の記述研究
今年度は次のような研究を行った。	
<p>(1)ポー・カレン語(Pwo Karen)については、Thurgood and LaPolla (eds.) 2017. <i>The Sino-Tibetan Languages (2nd Edition)</i>. London and New York: Routledge の第 50 章として、東部ポー・カレン語の概説を出版した(pp. 942-958)。ここでは、おそらく印刷物としては初めて、この言語において「物」を表す名詞が主語位置に現れて動作主非焦点化を行う現象について指摘した。chə dú ʔəwê (物／叩く／彼)のように、主語位置に「物」を表わす名詞 chə を置くことによって、動作主を目立たなくさせる文法現象である。日本語では、「彼は叩かれた」のように、受動態を使って訳すことができる。これ以外にも、動詞連続における動詞の配列の原理を詳述したほか、派生や複合などの形態法、代表的な助辞の用法などについて述べ、東部ポー・カレン語の概要がつかめるように工夫している。</p>	
<p>(2)ビルマ語については、ビルマ語と日本語の対照言語学的視点から、いわゆる結果キャンセル(result cancellation)の現象を考察し、論文の執筆を完了した。池上嘉彦らの研究によって、日本語では、「燃やしたけれど、燃えなかった」のように達成動詞の結果がキャンセルされる文が許容されるとされている。同様の現象がビルマ語にも存在する。ところが、上記日本語文とビルマ語の同様の文の意味を詳細に吟味すると、両言語には大きな違いが存在することが分かる。ビルマ語では、「燃える」という結果事象がまったく起きていない状況が表せるのに対し、日本語では結果事象が不完全な形で生起している状況でなければ文が成立しないと判断する話者が多いのである。このような検討を様々な動詞で行うことによって、日本語では、結果事象が段階的構造(scalar structure)を持つときに事象キャンセルが可能になることが多いことが分かった。段階的構造を持つと、不完全な形での生起という読みが容易になるためである。したがって、ビルマ語とは異なり、日本語には純粋な意味での結果キャンセルが存在しないと結論づけた。この論文は、Mouton の対照言語学シリーズに掲載される予定である。</p>	